

## 単元名 材料に命を吹き込む(絵や彫刻など)

配当時間 6時間

- 単元の目標 (1) 材料の形や色彩、質感などが感情にもたらす効果や、造形的な特徴などを基に、何かに見立てたりするなど全体のイメージで捉えることを理解することができる。
- (2) 材料を見つめ感じ取った形や色彩、質感の特徴や美しさなどを基に主題を生み出し、全体と部分との関係などを考え、創造的な構成を工夫し、心豊かに表現する構想を練ることができる。造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と工夫などについて考えるなどして、見方や感じ方を広げることができる。
- (3) 美術の創造活動の喜びを味わい、楽しく造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と工夫などについて考えるなどの見方や感じ方を広げる鑑賞の学習活動に取り組もうとする。

## 標準的な展開例

10270303\_001

【準備等】和紙、色紙、画筆、ローラー、絵皿、筆拭き、筆洗い、筆記用具、書道用具

学 習 活 動	留 意 事 項 など
<p>1 参考作品を鑑賞する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>教科書の作品から作者がさまざまな材料の形や色彩、質感からどのような見立てを行ったのかを想像しながら作品を味わう。</li> <li>★材料の特徴をどのように生かしているだろうか。</li> <li>「森の賢人」は材料の特徴を生かしてどのような見立てを行っているかを話し合う。</li> </ul> <p>2 主題を決める。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>木の枝や石、廃材などの形や色彩、質感などをさまざまな視点から観察し、動物の形や色彩、質感との共通点を探す。</li> <li>★素材の形や色・質感を生すような作品のコンセプトにしよう。</li> <li>ワークシートを活用し、アイデアスケッチを繰り返したり、必要に応じて、加工方法や用具の扱いについてメモをしたりしながら、作品のコンセプトをまとめる。</li> </ul> <p>3～5 主題を基に材料の加工方法を考え制作する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>★制作意図に応じた効果的な加工方法や構成を考えて制作しよう。</li> <li>材料の特徴を理解し、制作意図に応じた効果的な加工方法や構成を考える。</li> <li>材料の切断、研磨、接合などを工夫して制作を行う。</li> <li>制作意図に応じて着色したり、塗装したりする。</li> </ul> <p>6 鑑賞会を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>★友達の作品を鑑賞し形や色彩、質感などの工夫を見つけよう。</li> <li>友達が素材からどのような見立てを行い、どのような表現上の工夫をしたかについて話し合う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>作品を鑑賞し、それぞれの作者が素材の形、色彩、質感などからどのような見立てを行ったのか考えさせる。</li> <li>「造形的な視点」を確認させる。</li> <li>【評】材料の特徴やイメージをもとに、形や色彩、質感などの工夫を考えながら、鑑賞する活動を通して「思考・判断・表現」を評価する。</li> <li>木の枝や石、廃材などの形や色彩、質感の中に見られる動物の形や色彩、質感との共通点を見つけさせる。</li> <li>見つけた共通点をもとにどのような作品にするのかアイデアをまとめさせる。</li> <li>【評】身近な材料などの形や色彩の特徴をもとに見立てて表すことに関心を持ち、意欲的に取り組む活動を通して「主体的に学習に取り組む態度」を評価する。</li> <li>材料の特徴を理解し、材料の切断や研磨、接合などを工夫して作品制作を行わせる。</li> <li>【評】形や質感などの材料の特徴に着目し、何かに見立てたりしてイメージをとらえ、粘土の扱いや接着方法を工夫して表現する活動を通して「知識・技能」を評価する。</li> <li>友達が素材の形や色彩、質感からどのような見立てを行ったのか、また、見立てを生かすためにどのような工夫をしたかを想像しながら鑑賞させる。</li> <li>【評】材料の特徴やイメージをもとに、形や色彩、質感などの工夫を考えながら、鑑賞する活動を通して「思考・判断・表現」を評価する。</li> </ul>

## 【備 考】

日本人は古来より対象を他のものになぞらえて表現するという「見立て」を生活の中に取り入れてきた。枯山水の庭園はその一例である。「見立て」は身の回りの素材を見つめて感じ取った形・色彩・質感などの特徴と既知のイメージとの共通点を探す作業を通して行われ、分析的な思考が活用されている。また、「見立て」には、自分のイメージを他者に共感してもらうというおもしろさがある。マルセル・デュシャンの「泉」、鈴木康博や田中達也の作品が高い評価を得ているのは、この共感を促すための手だてが適切であったからだと言える。本単元は、共感を促すために素材の形・色彩・質感だけでは補えない部分をどのように表現するのかをしっかりと考えるように指導したい。